

## -2019 年度短期学術交流研究報告書-

(派遣交換研究者)

- ・ 国際コミュニケーション学部教授 鈴木 規夫 1【報告書】

(受入交換研究者)

- ・ 復旦大学教授 臧 志軍 7【報告書】
- ・ 上海交通大学教授 張 建華 10【報告書】

复旦大学陈树渠比较政治发展研究中心

短期学术交流

2019年8月15日～9月15日

実施報告

鈴木規夫

以下に同学術交流の実施の概要を記し、報告に替えたいと存じます。

2019年8月15日、上海空港への出迎えハイヤーに連れられ、正午頃、上海復旦外専家楼206室に到着、入居。同日夕刻、同大国際関係与公共事務学院包教授、同大日本研究中心徐教授と共に、懇談。中国における政党問題で大いに議論は盛り上がり、徐教授の文革時代の経験なども披露され、大いに知見を広げる。包教授に『内閣調査室秘録』中国語訳の出版を勧める。以後、居室と大学図書館および市内書店などにおいて、復旦大学関係者と連絡取りつつ、研究を進める。

8月26日～28日、臧志軍教授、包教授、徐教授と共に、安徽省皖南（績溪县）周辺を調査旅行実施。胡錦濤、江沢民それぞれ党主席経験者の所縁の地を訪ね、そこにおけるそれぞれの評価、対応などについて見聞を広げる。同時に、中華人民共和国建国以前からこの地方が果たした人材供給の機能と儒家諸制度のシステムについての実際を探る事になった。かなりハードな移動の視察になったが、多くの発見もあり、充実した時間を得た。

8月29日、出張から帰国した复旦大学陈树渠比较政治发展研究中心の郭所長を国関棟7階研究室に訪ね、日本における国政選挙をめぐる諸問題や中国国内問題などをめぐって懇談。今回の短期学术交流の深化は、復旦大学における政治学研究的の深化に直結すると激励を受ける。

8月30日、上海社会科学院宗教研究所にて、会場同院113会議室にて研究所所員二十名ほどの参加をえて、「「今、南原繁を読む」」をめぐって—南原繁『国家と宗教』の現代的意義」と題して報告。南原繁『国家と宗教—ヨーロッパ精神史の研究』をめぐって、その日本における受容と影響の大きさを示し、丸山眞男の著作の中国における翻訳の広がりとは比して、丸山に絶大なる影響を与えその学統を探る上でも重要な南原の政治哲学が、中国で敷衍しないままである要因について言及しつつ、梁漱溟との思想比較の可能性についても問題提起した。所員からの積極的な質問を多く受けだが、報告に関連して、イスラーム研究の立場から、最近の新疆ウイグル自治区における中国政府の対応について意見を求められたが、その応答として、中国史における唐代のような柔軟外交戦略の必要を説きつつ、もう少しスマートに展開しないと国際政治においても要点を見失う可能性のある事を指摘した。

9月2日～6日杭州に移動し、浙江理工大学外国語学院はじめ下沙学園都市に集まる、主に日本研究専門の研究者たちと学术交流。日本事情についてさまざまな問題について応答

する事になった。

9月8日、钟书阁·静安店（上海市静安区南京西路1601号芮欧百货4楼）にて、钟书阁·静安 | 变局如何发生：中日近代化的殊途 —— 《日本的“近代”是什么》新书分享会に参加、徐静波復旦大学教授と許紀霖華東師範大学教授とによる対談形式での展開であったが、途中、三谷教授と今回翻訳された当該本の日本における受容について問われ、短時間ではあったが解説した。その後、別の場所にて、陳上海大学教授、馬上海社会科学院研究員などと懇談し、上海研究の現況を伺うと同時に、年末放送予定のNHK制作「スペシャルドラマ ストレンジャー～上海の芥川龍之介～ A Stranger in Shanghai」に歴史考証などにおいて撮影協力したあれこれについても伺いつつ、意見交換する事となった。

9月12日、復旦大学陈树渠比较政治发展研究中心（CCPDS）学術会合研究会にて、「〈一带一路一天一空一心〉構想における多元一体構造の時間反転対称性」と題し、このひと月ほどの復旦での研究成果の一部を報告した（報告レジュメを以下に提示しておく）。

〈一带一路一天一空一心〉構想における多元一体構造の時間反転対称性

—世界秩序転換の思想的根拠—

鈴木 規夫

日本国愛知大学

はじめに

なぜ、世界秩序の再編が人類には必要なのか？

19世紀の「文明国という序列」幻想からの解放

近代化＝西洋化＝「近代文明の西洋的概念や技術を受容すること」→人種という要因：「文化と人種という概念は対になった互換可能な概念」→「文化国際主義が人種をめぐる議論に適切に対処しえなかったことは第一次世界大戦前の文化国際主義の弱点」

WWI以前のヨーロッパのナショナリズムは「ほとんどといってよいほど軍国主義の特徴を有していた」軍国主義の土台には教育制度があり、その教育制度の目的とは「戦争に肉体的に耐えられ、心理的に戦争に照準を合わせた世代を作り出すこと」（M.ハワード）

1920年代：世界の普遍性が高まることによってお互いを隔てる境界線の壁は低くなると感じられた→「人種と文化は死滅する、しかし文明は生き残る」（Robert Park）→

「異なる国の人々が文明の恩恵に等しくあずかる「一つの国際共同体」の形成」（Manley O.Hudson）

「世界を不変なものとする文明の力が、世界の人々を隔てる差異をとりのぞくか、あるいは世界の在り方を決める上では差異をなるべく目立たなくするであろう」といった議論へ

「アンダーソンが国民国家は「想像の共同体」であると評したように、国際共同体もまた「想像」されなければならない」「創成する」(Inventing) (Declan Kiberd) →「ナショナリズムと戦争が同一線上にあると論じられたように、国際主義者は国際主義が強化されたときにのみ平和は可能」

1930年代:1920年代の普遍主義への反作用としての「文化と人種と結び付ける旧来の定義」の巻き返し→ドイツと日本の人種優位主義

## 1. 〈一帯一路〉による地上の平和

なぜ、本土化か？

### 19世紀社会主義の国際主義と世界秩序イメージ

平和と正義の世界秩序は労働者が国境を越えて団結し、労働者を抑圧してきた国家という体制に終止符が打たれるときに可能だと主張→ジョル、ガリー、エンゲルス:戦争後に予測される破壊と混乱は労働者たちが権力を奪取する好機→資本主義諸国家間の戦争は労働者にとって歓迎すべきもの→戦争は労働者の抑圧を永続的なものとする

資本主義的平和よりまし→軍国主義、帝国主義など国家の権力が強化される政治形態には終始反対(ex.1905年日露社会主義者がアムステルダムで会し日露戦争に反対宣言)→国際労働者協会の設立(第二インターナショナル):一般市民の尊厳と福祉をめざす正義に基づく平和によって世界中の労働者の利益に尽くす組織。1889年。ブリュッセル。

国内政治秩序の選択や国際貿易の促進といった機能主義的な論点を有する社会主義的国際主義は文化国際主義と性質を異にするが、主権国家の存在を捨象して人道性に目をむける点で人間の共生を志向する(ハーマン)

西欧中心秩序・文化・システムへの懐疑

社会主義を含む多文化的な方向→多文化的な世界では各文化はユニーク→文化相互間の対話は困難(自己文化至上主義)の傾向が必然的に内在。→WEST vs. RES→秩序化困難ジレンマ

このような動きを抑止できるのは、新しいタイプの文化国際主義→相互文化理解のみでなく、環境破壊、人権、人口爆発など地球大の諸問題は文化を超えて協力可能か？

第二次世界大戦後の多文化社会は、また同時に相互文化共同体でもあった→この知的共同体においては文化的異質性を保持しつつ文化的変革が同時に進行し文化国際主義の概念をさらに豊かにできるのか？ グローバリズムの自己陥穽

新しい国際主義は、個々の運動のどれよりも包括的、総合的なものであり、人類と世界全体の利益、理想、希望」を考えるものである必要があり、「利益と理念を共有し国家間の差異

や敵意を克服する想像の世界秩序のイメージ」 提示しつつ展開される必然性

20 世紀的帝国主義における、社会主義への懐疑に付加される中国への懐疑 →中国の可能性の鍵は〈本土化〉の豊穡な多義性への展開にあり

「ヨーロッパのすべての国が軍縮と平和に同意したとしても、広大で渾沌極まる中国はどのようなのだろうか。四億の人口を有する国がモルトケのような人物を排出したら、世界は一日のうちに新たな夷狄の侵攻によってひっくり返るであろう」（仏詩人コッペ、義和団事変の列国出兵に際して）→「我々の人種と宗教的な同胞のために、…キリスト教と文明のために」国際的な同盟をつくりだすべきであると主張→黄禍論

21 世紀における「新黄禍論」への懸念

## 2. 〈一天一空〉による天上の平和

「情報を制するものは世界を制す」

「中国製造 2025」の戦略構想

「空中シルクロード」→2017 年 6 月ルクセンブルクのベッテル首相が対中国交樹立 45 周年記念訪中した際、習近平主席が首脳会談の席上で、「中国側は鄭州〜ルクセンブルク間の『空中シルクロード』の建設を支持する」と表明→2019 年 4 月 2 日第 4 回空のシルクロード国際フォーラム、香港で開催

（テーマ「中国航空産業と国際協力」）

2018 年 9 月 13 日「空中シルクロード国際航空協力サミット」（北京）開催（主宰中国航空工業集团有限公司）、一带一路沿線国航空関係者代表参加、「空中シルクロード聯盟」結成提唱。→サミットに参加した国務院国有資産監督管理委員会・国際合作局張發衛副局長発言。

「「空中シルクロード」は「一带一路」建設の次元を 2 次元から 3 次元に高めていくもので、陸や海洋の間の重要拠点をつないでいくだけでなく、空をもつなぐわけです。中国航空工業集団が提唱する「空中シルクロード」は、「一带一路」沿線国家のうち、発展途上国にある国々の航空産業発展を強化し、航空事業の突破口として頂くために提案された方策です。製造、建設、運営、融資などの機能を一体化し、産業連盟を結成して、「一带一路」沿線国家のプラットフォームに中国方案を利用していただこうと考えております。」

2016 年 12 月 27 日『2016 年 中国宇宙白書』—今後 5 年間で優先分野における豊富な国際宇宙交流と協力を展開： ——「一带一路」宇宙情報回廊の構築を完成させ、地球観測・通信放送・衛星ナビゲーションなどの人工衛星の研究開発、地上システムと応用システム、応用製品の開発などを通して、宇宙から支援

「中国の宇宙事業は、1956 年の誕生以来 60 年の輝かしい歴史を経ており、「両弾一星」のローガンで開始され、輝かしい成果の代表として、有人宇宙飛行や月探査があり、自立更

生・自主技術革新の発展路線を進み、深遠な宇宙精神を蓄積してきた。宇宙精神を継承し、技術革新の熱意を鼓舞するため、中国政府は2016年から、毎年4月24日を「中国宇宙の日」とすることを決定した。今後5年間とその後の一時期において、「宇宙の広大さを探り、宇宙事業を発展させ、宇宙強国を建設することは、私たちが常に追い求めてきた宇宙の夢であり、中国は技術革新・協調・環境保護・開放・共有の開発理念を堅持し、宇宙科学・宇宙技術・宇宙応用の全面的な発展を推進し、国家の発展と人類の福祉の増進にさらに大きな貢献をする。」

「量子科学実験衛星を利用し、宇宙スケールでの量子暗号通信、量子エンタングルメント（纠缠分发）及び量子テレポーテーション（隠形伝態）等の量子科学実験や研究を行う。」  
2015年国防白書「中国の軍事戦略」（中国國務院報道弁公室2015年5月26日）→

「空天一体能力の建設及び攻防作戦実施の戦略的要求に沿って、中国空軍は国土防空から攻防兼備への焦点移行に尽力し、情報化作戦の要求に適う航空宇宙防御体系を構築する。空軍は、戦略早期警戒・航空打撃・防空及びミサイル防衛・情報化対抗・空挺作戦・戦略的投射及び包括的支援の能力を増進する。」

中国科技大学の潘建偉教授と彭承志氏、中国科学院の王建宇氏、オーストリア科学アカデミーのAnton Zeilinger氏などのチームが、量子暗号通信の長距離通信に成功

### 3. 量子脳理論による〈一心〉

「量子脳理論」提唱者：ロジャー・ペンローズ（宇宙物理学者・理論物理学者）とスチュワート・ハメロフ（麻酔科医・医学博士・アリゾナ大学准教授・アリゾナ大学意識研究センター所長）。

意識に関する理論は、「Orchestrated Objective Reduction Theory（統合された客観収縮理論）」、または略して「Orch-OR Theory（オーチ・オア・セオリー）」。

「心、または意識に関する量子力学的アプローチ（Quantum approach to mind/consciousness）」、「クオンタム・マインド(Quantum mind)」、「量子意識（Quantum consciousness）」などとも

→「私たちの意識は、量子情報（素粒子）で出来ている」→「肉体が死ぬと、脳内の意識が素粒子として飛び出し、宇宙または高次元に繋がる」

「量子もつれ（エンタングルメント）」：素粒子は観測すると、時間や距離とは関係なく一瞬でつながる、という量子力学特有の相関です。

意識は脳の周囲にある“場”の中に存在する。“場”自体は人間が認識できない4次元に存在し、脳と量子もつれの状態にある。脳の情報処理は、現在考えられている脳内の神経伝達だけでは説明できないほど高速。

“量子もつれ”の状態にある2つの量子は、たとえ物理的に引き離れたとしてもいわば運命

共同体のように分かちがたく結びついた存在。例えば、量子もつれ状態にある 2 つの量子が、宇宙の端から端まで引き離されたとしても、量子論的には 2 つの量子は同期する。

むすびに

「我々は狂人の世界に生きている。ここでは、対立する者同士の立場が常に変転するのであり、平和主義者はヒットラーを崇拜し、社会主義者はナショナリストとなり、愛国者は裏切り者となり、仏教徒は日本軍の戦勝を祈り、ソ連軍が反攻に転じると株式市場が高騰する」  
(George Orwell)

以上

## 研究報告書

復旦大学 国際関係・公共事務学院

教授 臧志軍

1993年6月、私は初めて日本に来た。その時の受け入れ機関は愛知大学である。交換研究員として丸一年間の滞在期間で、指導教授の加々美光行先生から教えていただいて研究活動をした同時に、豊橋の地元の方々とも様々な交流した。その後、共同研究や会議などで何回も愛大に帰り、いろいろお世話になってきた。今回、鈴木規夫教授のご推薦で、再び愛知大学から研究滞在の招聘を頂き、非常に感謝いたします。

10月31日～11月28日という小一か月の滞在期間において、集中講義の他、「資本主義の日本の特徴とその世界史における位置付け」という研究プロジェクトに関連した幾つかのテーマで研究活動をした。時間の制限で、一部のテーマは資料収集段階にとどまり、ここで、初歩的な考えが形成した過疎化対策について、集約的に報告する。

農村地域の過疎化は、中日韓などの東アジア諸国が自国の経済成長において、みんな直面してきた課題である。日本は1950年代から高度成長期に入ってから、東アジア諸国で最も早く過疎化課題にぶつかったが、韓国はその後、中国は1970年代末改革開放時期に入った後、特に1990年代から農村部の過疎化が嚴重化になってきた。

過疎化対策は、非常に困難な課題である。資金の調達や産業振興、持続的発展などの難しさは言うまでもなく、理論面においても次のように二つの大難問が存在している。まず、歴史的な視点から見れば、多数の労働人口が第一次産業の農業から離脱し、第二・三次産業への転職のため都市部へ移住することこそ、経済・社会発展の表現である。言い換えれば、一部地域の過疎化或いは消失が、新しい町の誕生や都市の繁栄の対価として、避けたくても避けられないように必然なことではないかであろう。我々は、最終には本当にこの進行過程を阻止できるのか。また、公共利益や行政の合理性から言えば、多くの公共資源を、人口数も少なく、広い過疎地域に散居した住民たちに投入したのは、効



率とかは無論で、本当に公平・正義なことであるか。

日本の場合、その憲法に、幸福追求や健康で文化的な最低限度の生活を営むなどの国民権利が明記し、また、地方自治制度の国なので、現実的な政策という次元で、以上のような考えが取り組まれるのは不可能になろう。逆に、過疎地域に住んでいる居民たちの福祉をどのように保障するか、如何に過疎地域を振興するかは、1950年代からも、大きな政策課題として検討され、様々な措置が実施されてきた。

しかし、その政策効果から見れば、問題の完全解決にはまだ程遠い。現在でも、日本は8.6%の人口しか全国面積の59.7%を占める地域に散居していない。今回滞在中、フィールドワークに日本海側に行ってきた。あそこの過疎集落での「十軒九空」と言ってもいい状況に心も震わされた。特に過疎地域における人口高齢化比率が他の地域より20年も早いと言われて、過疎問題の深刻化はさらに実感された。

にもかかわらず、日本の国や地方による様々政策措置・プロジェクトの陰で、全体から言えば、過疎地域に住んでいる居民たちの基本的な生活と、医療・教育・交通などの基本的な公共サービス供給方面には、その不便さの他、大きな問題がないということは、データによっても、フィールドワークによる印象によっても断言できる。

研究収穫のもう一つは、過疎地域で実施された公共事業の評価に関する認識にある。日本では、昔から「政―官―（建設）業」癒着構造という角度から過疎地域で実施された公共事業への批判が多い。私もあの論調の影響を受けてきた。今回の研究を通じて、この問題はそう簡単でないという新しい認識が形成した。国民の一般的考え方によっては、過疎地域への公共資源投入が非効率なことで、やめた方がいいという結論が出やすく、過疎地域関係者による大きな声がなければ、その地域の居民の利益が軽視・無視される可能性が高いなる。また、過疎地域への投資が非効率性なので、民間資金の誘致が難しく、国や都道府県による公共事業がないならば、地元の建設業も生存できなく、あそこの就職問題が一層嚴重化し、過疎問題もさらに深刻化になろう。この点から考えれば、「金権交換」は別に、過疎地域での「政―官―（建設）業」癒着構造の

存在は全く合理性・正当性がないとは言えなからう。非効率にもかかわらず、過疎地域における居民生活や経済活動を営むため、公共事業の建設や維持の面で、国や上級地方によるある程度の持続的投入がいつまでも必要だかもしれない。

中国もますます嚴重化になった過疎問題に直面している。日本は長い時期にかけて、過疎問題の解決に努力してきた。その努力は完全に成功したとは言えないにもかかわらず、その経験や教訓は研究と参考に値する。大きな方面から総括すれば、参考になれることは少なくとも次の点がある。

1. 関係立法の重視及び関係法律システムの構築ということ。2. 公共サービスの均等化を過疎対策と区別し、前者を通じて基本的な公平問題に対応し、後者を通じてさらに高レベルの公平と持続的発展という問題を解決すること。3. 国と地方の重要な課題として、専門部局を設置し、持続的に公共事業や公的資金で対応すること。

当然、日本と中国は基本的な制度も違ふし、現場の事情も違ふ。しかし過疎対策にとっては、違つたところにおいても互いに参考できるものも存在している。例えば、日本では、土地私有化で農村部においても都市部においてもその土地の売買が可能で、過疎対策における人口導入関係政策の作成と実施には便利である。中国では、農村の土地は村集団的所有で、外来者個人が村から住宅地の購入もできないので、人口導入には大きな阻害要因が存在している。過疎対策における土地流通可能ということの重要性では、日本の経験が中国の参考になれる。一方、中国での農村振興において、空洞化した貧困村に村駐在工作隊・村駐在第一支部長を派遣し、村のカバナンス構造を再構築して、その村振興事業を効率的に企画し、推進する、というやり方は特徴的である。日本での過疎集落の振興では、大きな問題は実は集落カバナンス構造の崩壊にあるので、中国の村カバナンス構造再構築優先という対策路線は日本にとって何か参考になれるかもしれない。

以上のように、東アジア国としての中国と日本は、お互いに研究に値する分野は非常に多く存在し、これからの研究交流も期待しておく。

以 上

## 中国人学習者の二字漢字語彙習得に関する考察 — 二字漢語サ変動詞を中心に —

上海交通大学外国語学部 張 建華

### 1. 研究背景

中国語と日本語は言語系統的には異なる言語であるが、漢字という共通の表記媒体を持つことで、2言語間に多量の二字漢字語彙を生み出している。国立国語研究所(1964)の調査によると、雑誌90種の異なり語数は漢語が約5割を占めるといわれている。また、Yokosawa and Umeda (1988)は、5万語ほどの見出し語を収録した国語辞典では、二字漢字語彙(以下は二字漢語と略す)の割合は、約70%であると計算した<sup>1)</sup>。二字漢語は日本語語彙全体の中で非常に高い割合を占めることから、日本語教育では重要視されてきた。ここ数十年、二字漢語については、対照研究(文化庁1978; 荒川清秀1979; 石堅・王健康1983; 陳2002; 熊可欣・玉岡賀津雄2014など)、誤用研究(三喜田光次2000; 河住有希子2005; 五味・今井・石黒2006; 大塚薫、林翠芳2010など)、習得研究(安2001; 小森2014; 崔娉2015など)、また言語心理学の研究(邱学瑾2010; 小森和子・玉岡賀津雄2010; 費曉東・松見法男2012など)などが盛んに行われ、研究成果も多く見られた。しかし、これらの研究のほとんどが、アンケート調査やテスト判断法によるもので、学習者が実際に二字漢語をどのように理解、運用するのか、その実態はまだ明らかになっていない。したがって、本研究は『日本語学習者書き言葉コーパス』<sup>2)</sup>に基づいて調査し、中国語を母語とする日本語学習者の二字漢語の使用実態を明らかにし、日本語の漢語語彙教育のために提言したい。

### 2. 研究課題と資料

本研究は、二字漢語サ変動詞(以下は二字サ変動詞と略す)を主とし、『日本語学習者書き言葉コーパス』を利用して、次の問題について検証する。

- ① 学習者の文章において、二字サ変動詞がどのように使用されるのか。
- ② 学習者の日本語熟達度が、二字サ変動詞の習得に影響を与えるのか。

研究資料は『日本語学習者書き言葉コーパス』のうち、大学二年一学期(以下、x3と略す)と三年一学期(以下、x5と略す)の学生の作文を調査対象とする。

表1 研究資料の内訳

学年	人数	作文件数	語数
x3	33	393	93783
x5	111	383	151310
合計	144	776	245093

1. 熊可欣・玉岡賀津雄(2014)によるもの。
2. 中国国内の大学で日本語を専攻とする学生が書いた作文が1977件収録され、誤用タグが付与されたタグ付きコーパスです。学習者の日本語熟達度は、日本語中級レベルから高級レベルまでです。

<http://tesol.situ.edu.cn/index.php/Public/login>

### 3. 調査手順

- 1) 調査対象のテキスト全体を「MeCab」で形態素解析する。
- 2) テキストに含まれる二字サ変動詞を機械的に抽出する。
- 3) 「リーディングチュウ太」によって、二字サ変動詞の語彙レベルを判定する。
- 4) データをExcelで整理、統計する。
- 5) カイ二乗検定で出現頻度の統計的有意性を確認する。

### 4. 調査結果と分析

表2 二字サ変動詞の分布

コーパス	総語数	延べ語数		異なり語数	
x3	93783	3310	3.5%	422	12.7%
x5	151310	4995	3.3%	815	16.3%

表2は「MeCab」によって、調査資料を形態素に解析し、統計した結果である。まず、延べ語数で見た場合、x3で3310語、x5で4995語の二字サ変動詞が使用された。次に異なり語数で見た場合、x3で422語、x5で815語の二字サ変動詞が用いられた。

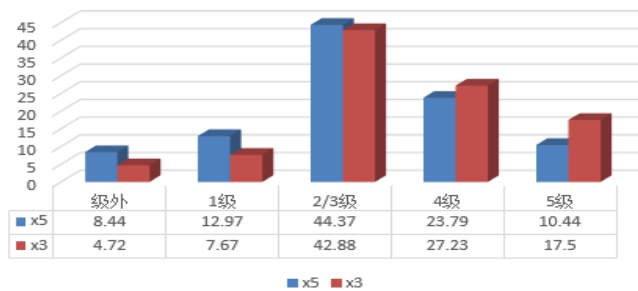
表3 語彙レベルの分布

レベル	x3				x5			
	延べ語数		異なり語数		延べ語数		異なり語数	
N5	70	2.1%	12	2.8%	105	2.1%	14	1.7%
N4	666	20.1%	27	6.4%	627	12.6%	27	3.3%
N2N3	2280	68.9%	213	50.4%	3333	66.7%	330	40.4%
N1	183	5.5%	90	21.3%	549	11.0%	211	25.9%
級外	111	3.4%	81	19.1%	381	7.6%	234	28.7%
総計	3310	100.0%	423	100.0%	4995	100.0%	816	100.0%

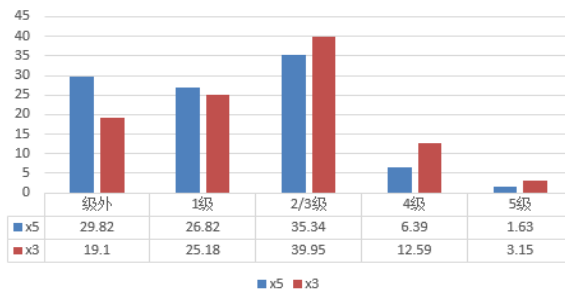
表3は2組の二字サ変動詞の語彙レベルの分布である。語彙レベルの判定は「リーディングチュウ太」によって行われた。調査資料に含まれているすべての二字サ変動詞が、それぞれ1級から5級までの5つのレベルに分類され、その基準からはずれたものは級外にされた。

各レベルの二字サ変動詞の出現頻度について、高頻度から低頻度の順に並べていけば、延べ語数の場合、2組とも、N2N3>N4>N1>級外>N5という順序になっているが、異なり語数で見た場合、x3ではN2N3>N1>級外>N4>N5という順序で、x5ではN2N3>級外>N1>N4>N5という順になっている。

2組間語彙レベル分布の比較(延べ語数)



2組間語彙レベル分布の比較(異なり語数)



また、2組における各レベルの二字サ変動詞の出現頻度については、延べ語数で見た場合、x3でN2N3とN4の語彙がより多く用いられるに対し、x5ではN1と級外の語彙が最も多く使用されていることがわかる(表4)。カイ二乗検定で有意差を示している。

表4 各レベルの二字サ変動詞における延べ語数のカイ二乗検定結果

個別の語	カイ二乗値	p値	自由度(df)	個別の語の頻度の差の有意性判定	頻度が高いコーパス
N5	0.00	1.0000	1	有意差なし ( $\chi^2 = 0.00, p=1.000$ )	
N4	86.17	0.0000	1	有意水準0.1%で有意差あり ( $\chi^2 = 86.17, p=0.000$ )	x3
N2N3	4.12	0.0423	1	有意水準5%で有意差あり ( $\chi^2 = 4.12, p=0.042$ )	x3
N1	73.23	0.0000	1	有意水準0.1%で有意差あり ( $\chi^2 = 73.23, p=0.000$ )	x5
N0	64.49	0.0000	1	有意水準0.1%で有意差あり ( $\chi^2 = 64.49, p=0.000$ )	x5

表5 各レベルの二字サ変動詞における異なり語数のカイ二乗検定結果

個別の語	カイ二乗値	p値	自由度(df)	個別の語の頻度の差の有意性判定	頻度が高いコーパス
N5	1.20	0.2728	1	有意差なし ( $\chi^2 = 1.20, p=0.273$ )	
N4	5.60	0.0180	1	有意水準5%で有意差あり ( $\chi^2 = 5.60, p=0.018$ )	x3
N2N3	10.72	0.0011	1	有意水準1%で有意差あり ( $\chi^2 = 10.72, p=0.001$ )	x3
N1	2.93	0.0867	1	有意差なし ( $\chi^2 = 2.94, p=0.087$ )	
N0	12.84	0.0003	1	有意水準0.1%で有意差あり ( $\chi^2 = 12.84, p=0.000$ )	x5

異なり語数で見た場合、x3においては、N2N3とN4の二字サ変動詞の語数がより多いのに対して、x5では、級外の二字サ変動詞の語数が圧倒的に多いことがわかる(表5)。カイ二乗検定で有意差を示している。

## 5. まとめと今後の課題

以上の調査結果から、中国人学習者が、二字サ変動詞の習得において、日本語の熟達度が上がるとともに、母語の知識を生かして、積極的に漢語語彙を学習し、教室で教えてい

ない級外のような難しい低頻度語もたくさん用いることが確認された。母語の漢字知識が漢語習得の大きな助けとなることから、日本語教育の現場に積極的に母語との類似性を生かして指導することを薦めるべきである。しかし一方、漢語を日本語としてではなく中国語として理解し使用することによる誤用が生じやすい。したがって、中国人日本語学習者が生じやすい誤用に配慮し、独自の漢語教育の方法を考えるべきだと思う。

本研究は語彙の難易度から、中国人学習者の二字サ変動詞の習得について考察してみたが、今後、各学習段階における二字サ変動詞の習得について、どのような誤用が生じやすいのか、異なる意味タイプの二字サ変動詞が同じように習得されるのか、また、他言語の母語話者との比較を行うことを通して、中国人学習者との相違性を確認しながら、母語の影響も考えたい。

## 参考文献

- 荒川清秀(1979)「中国語と漢語-文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」『愛知大学文学論業』61:1-28
- 安龍洙(2001)日本語学習者の漢語の使用意識に関する研究-韓国人学習者と中国人学習者を比較して-『言語科学論集』5号
- 大塚薫、林翠芳(2010)「中上級レベルの日本語学習者の作文教育-意見文にみる語彙・漢字使用及び誤用の分析結果を踏まえて-」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』4:47-66
- 河住有希子(2005)「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』53-65
- 邱学瑾(2010)日本語学習者の日本語漢語語彙処理のメカニズム-異言語間の形態・音韻・意味のをめぐって-146:49-60
- 国立国語研究所(1964)『現代雑誌九十種の用字用語調査(3)』秀英出版
- 五味政信・今村和宏・石黒圭(2006)「日中語の品詞のズレ:二字漢語の動詞性をめぐって」『一橋大学留学生センター紀要』9:3-13
- 小森和子(2014)「日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響-中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して」『明治大学国際日本学研究』1:91-115
- 小森和子・玉岡賀津雄(2010)「中国人日本語学習者による同形類義語の認知処理」『レキシコンフォーラム』5:165-200
- 崔娉(2015)「日本語の未知漢字語彙の意味推測に見る中国語を母語とする学習者の推測手がかりの利用-漢字語彙の日中対応関係及びL2習熟度の観点から」『言語文化と日本語教育』50:61-70
- 石堅・王健康(1983)「日中同形語における文法的ズレ」『日本語・中国語対応表現用例集』5:56-82
- 陳毓敏(2002)「日本語二字漢語語彙とそれに対応する中国語二字漢語字語彙は同じか:台湾及び中国の中国語との比較」『言語文化と日本語教育』24:40-53
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 費曉東・松見法男(2012)「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知-中日二言語間の形態・音韻類似性による影響-」『中国四国教育学会 教育学

研究ジャーナル』11：1-9

三喜田光次(2000)『ここが違う日本語語彙と中国語語彙』天理大学出版部

熊可欣・玉岡賀津雄(2014)「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27：25-52

张建华(2014)日语学习者语料库的构建，《中国日语教学研究文集之10 中日跨文化交际研究》大连理工大学出版社。